

眼科臨床エキスパート 所見から考えるぶどう膜炎 第2版

吉村 長久, 後藤 浩, 谷原 秀信 シリーズ編集 園田 康平, 後藤 浩 編

眼球は、大ざっぱに言えば膠原線維の膜（角膜・強膜）、血管の膜（虹彩・毛様体・脈絡膜）、神経の膜（網膜）の3枚で構成されている。血管の膜は暗紫色を呈しているため、眼球から膠原線維の膜を取り去った際の外観から、虹彩・毛様体・脈絡膜を合わせて「ぶどう膜」と呼ぶ。このぶどう膜は血管が豊富な故、炎症を起こしやすく、膠原病や自己免疫疾患、がん、感染症などの全身疾患に由来した異常所見を見ることも多い。

眼科医師として、このぶどう膜の炎症を苦手と感じるのは、何だかよくわからないこと、治療に終わりが見えないこと、最近話題の生物学的製剤は高価で安易に使えないこと、眼科医だけでは解決できない疾患が多い、といった高いハードルを感じるからである。

本書は、読者のぶどう膜炎への苦手意識に応え、実際に目に見える眼所見にこだわって、そこから診療につながる系統的な考え方を身につけられるようにという目的で編集されている。その初版は2013年4月に出版されているが、この間に画像診断法を含む検査法の進歩、生物学的製剤など新たな治療法が加わり、Behçet病が減ってヘルペスウイルス前部ぶどう膜炎が増加してきたなど、わが国でのぶどう膜炎診療にも大きな変化があった。そのため、約10年を経てバージョンアップされた第2版として2022年7月に発行されている。

本書は「総説」「総論」「各論」の3章で構成されており、総説では、園田康平教授が、ぶどう膜炎の分類と診断から治療に至るプロセスを概括しておられる。ことに「表1 問診の予備知識」(p.6)は秀逸で、ぶどう膜炎を大枠でとらえるのに役立つ。

総論では、ぶどう膜の解剖・生理、ぶどう膜炎の疫学、画像診断という、疾患の病態をとらえるのに必要な情報が示された上で、角膜後面沈着物、虹彩癒着・

虹彩結節、前房蓄膿、硝子体混濁など、一般的な眼科診療で見えてきた所見からぶどう膜炎を疑った場合、どう考えてどう鑑別を進めていくかのコツが述べられている。すなわち、これが本当にぶどう膜炎なのかどうか、緊急度の高い病態なのか、感染性か非感染性か、非感染性なら3大ぶどう膜炎（Behçet病、Vogt-小柳-原田病、サルコイドーシス）なのかそれ以外なのか、という考えで鑑別を進めていくことが大切で、その考えで観察すれば、普通の眼科診察室で十分できることなのである。

各論では、原因のわかっているぶどう膜炎についてそれぞれの病態と診断、治療を解説しているが、大きく分ければ3大ぶどう膜炎に代表される内因性のもの、ヘルペス属のウイルスや真菌、原虫などによる感染性のもの、そして悪性リンパ腫や白血病に伴う仮面症候群の3つだろうか。一般の眼科医としては、感染性ぶどう膜炎、仮面症候群はなかなか手に負えるものではなく、内因性ぶどう膜炎にしても、サルコイドーシスなど患者の生命にかかわる疾患が含まれているため、ぶどう膜炎診療については専門家や他診療科の医師に診察を依頼するタイミングが重要である。各論ではそうした線引きについても学ぶことができる。

本書を通して読んでみると、ぶどう膜炎は決して謎めいたものではなく、タイトルの通り「所見から考える」ことで見えてくるものがあることがわかる。したがって、日常の診療に携わる眼科医師だけでなく、ぶどう膜炎の患者さんにかかわる可能性のある診療科の医師にも本書をお勧めしたい。

トヨタ記念病院眼科部長
平野 耕治

B5・頁328 2022年07月
定価：17,600円（本体16,000円＋税10%）
[ISBN978-4-260-04935-1] 医学書院刊